エリック・サティ（Éric Alfred Leslie Satie、1866 年 5 月 17 日 – 1925 年 7 月 1 日）

フランスの作曲家で、近代音楽に大きな影響を与えた人物の一人です。サティはユニークで個性的な作風を持ち、音楽的な規則にとらわれず、新しい音楽の表現方法を探求しました。彼の作品には、前衛的でありながらもユーモラスで　独特な音楽性が特徴です。

生涯

サティは 1866 年にフランスのオノフルールで生まれました。若い頃にパリ音楽院に入学しますが、規律や伝統的な音楽教育に反発し、失敗とされました。その後、サティはカフェやキャバレーで働きながら作曲活動を続ける生活を送りました。彼は当時の音楽的常識に対して批判的で、パリのモンマルトル地区で前衛的な　芸術家たちと交流し、風変わりで非伝統的なスタイルを確立しました。

サティの人生の転機となったのは、1890 年代に象徴主義詩人ステファヌ・マラルメや詩人ジャン・コクトーとの交流を通じて、前衛芸術の中心に立つようになったことです。さらに、若き日のモーリス・ラヴェルやクロード・ドビュッシーとも交友を深め、彼らの音楽にも影響を与えました。

彼は貧しい生活を送りつつも、創造性に満ちた生活を続け、時には奇抜な行動や言動で知られました。晩年はジャン・コクトーと組んでバレエ音楽《パラード》（1917 年）を手掛け、成功を収めましたが、サティは 1925 年に肝硬変で亡くなりました。

作品とピアノ曲

サティの作品は非常に多様で、特にピアノ曲が有名です。彼のピアノ作品はシンプルな構造と反復的なリズムを持ち、感情を抑えた表現が特徴です。また、従来の和声進行や形式にとらわれない自由な音楽言語が使われています。

《ジムノペディ》（Gymnopédies、1888 年）

エリック・サティの《ジムノペディ》（Gymnopédies）は、1888 年に作曲された 3 つのピアノ曲

で、彼の最も有名な作品の一つです。それぞれが緩やかで瞑想的な性質を持ち、シンプルな旋律と和声が特徴的です。これらの曲は、サティの独創的な音楽スタイルを代表する作品であり、後の印象派音楽に影響を与えました。

タイトルの「ジムノペディ」は、古代ギリシャの裸体舞踊「ギムノペディア」に由来するとされていますが、実際にどのような関連があるかは不明です。全体として、これらの作品は簡潔な形式と不安定な和声進行を持ち、独特の夢幻的な雰囲気を漂わせています。

《ジムノペディ第 1 番》(Lent et douloureux)　最も有名で、よく演奏される曲です。「緩やかに、悲しげに」というテンポ指定があり、柔らかく流れるような旋律と伴奏が特徴です。左手は単純なアルペジオの伴奏を担当し、右手が穏やかな旋律を奏でます。全体的に静かなムードが漂い、終始メランコリックな雰囲気が支配しています。

特徴　シンプルなアルペジオ伴奏と反復的なメロディ。不安定な和声進行が瞑想的な雰囲気を作り出す。穏やかで感傷的な感情を喚起する音楽。

《ジムノペディ第 2 番》(Lent et triste)　「緩やかに、悲しげに」というテンポ指示があり、3 曲の中で最も暗く、やや神秘的な雰囲気を持っています。第 1 番に比べて、重々しい響きがあり、旋律もさらに抑制されたものとなっています。右手の旋律は控えめで、低音部の響きが豊かな音を作り出します。

特徴　第 1 番に比べて重厚な響き。メロディと伴奏の役割が逆転し、低音が際立つ。神秘的で悲しげな感情が強調される。

《ジムノペディ第 3 番》(Lent et grave)　「緩やかに、重々しく」というテンポ指示がありますが、この曲は他の 2 曲に比べるとやや明るく、終止感がある作品です。旋律は第 1 番に近いですが、より豊かなハーモニーと調性の動きがあります。全体的に静かで落ち着いた雰囲気が続きますが、他の曲に比べて安定感があり、完結した印象を与えます。

特徴　第 1 番と似た旋律的な要素があるが、より豊かなハーモニー。　完結感があり、他の 2 曲に比べて明るい要素が感じられる。　穏やかで重厚な音楽の流れ。

総括

《ジムノペディ》は、そのシンプルさの中に深い感情や瞑想的な雰囲気を感じさせる作品で、サティの個性が凝縮されています。旋律の反復と和声の微妙な変化によって、静かで内省的な音楽世界が作り出されています。これらの曲は、ドビュッシーがオーケストレーションしたことでさらに人気が高まり、現代でも多くの演奏会や録音で親しまれています。

《グノシエンヌ》(Gnossiennes、1890 年頃)

6 曲からなるこの作品もサティの代表作であり、伝統的な拍子記号や調性を無視した構造が特徴です。東洋的な響きやミステリアスなムードが漂い、 非常に独創的です。

エリック・サティの《グノシエンヌ》(Gnossiennes)は、1890 年から 1897 年にかけて作曲されたピアノ独奏曲のシリーズで、6 曲が知られています。この作品はサティの独創的なスタイルを示しており、彼の《ジムノペディ》と同様に、簡素で独特な旋律と和声を特徴としています。

「グノシエンヌ」というタイトルは、サティによって造られた言葉で、意味は明確ではありません。「グノーシス主義」(古代の神秘思想)に由来する可能性が示唆されていますが、サティ自身の意図は不明です。

それぞれの《グノシエンヌ》は番号で区別されていますが、サティは当初これらに伝統的な楽式や形式的な指示を与えていませんでした。その代わり、詩的な演奏指示が曲中に記され、演奏者の感性に委ねられています。

《グノシエンヌ第 1 番》

1890 年頃に作曲され、最も有名な作品です。この曲は、静かで流れるような旋律が特

徴的で、拍子やテンポの規定がないため、自由なリズム感が求められます。和声はシンプルでありながらも、調性感が曖昧で、浮遊感のある独特の雰囲気を醸し出しています。

- 特徴: 静かで瞑想的な旋律、明確な拍子感の欠如、詩的な演奏指示。
- 印象: 夢のような浮遊感と、不安定ながらも落ち着いた響き。

《グノシエンヌ第 2 番》 第1番に比べて、より暗く陰鬱な雰囲気を持っています。テンポは比較的遅く、旋律は穏やかで繰り返しが多く見られます。右手の旋律は静かに進行し、左手のシンプルな伴奏がそれを支えます。

- 特徴: より暗い音色と静かな表現、反復的な旋律構造。
- 印象: 静かで孤独感のある雰囲気、内省的な音楽。

《グノシエンヌ第 3 番》 他の2曲と同様に、静かでメランコリックな雰囲気を持つ曲です。旋律は第1番に比べて短く、間奏的な性格を持ちます。この曲では詩的な演奏指示が多く、感情的なニュアンスを込めることが求められています。

- 特徴: 短いフレーズの反復、独特の感情的ニュアンス。
- 印象: 内面的で、自由な感情表現を促す音楽。

《グノシエンヌ第 4 番》 第4番は、1891 年に書かれたもので、他の作品と比べるとより不安定で神秘的な雰囲気があります。調性がさらに曖昧で、静かな中にも緊張感が漂います。旋律がゆっくりと変化しながら、繊細な表現が求められる曲です。

- 特徴: 調性感の曖昧さと繊細な響き。
- 印象: 不安感や神秘的な空気が漂う、夢のような音楽。

《グノシエンヌ第 5 番》 この曲も 1891 年に書かれ、他の《グノシエンヌ》と同じく、シンプルながらも詩的な作品です。旋律は比較的穏やかで、和声の変化が少ないため、静かなムード

が続きます。詩的な演奏指示が重要な役割を果たしており、演奏者は感性をフルに発揮して表現する必要があります。

- 特徴: 穏やかで抑制された音楽、詩的な表現の強調。
- 印象: 安らぎと神秘が同時に存在するような音楽。

《グノシエンヌ第 6 番》 1897年に作曲されたこの曲は、最も後期の作品です。他の作品と同様、旋律は静かに進行しますが、やや暗く重々しい雰囲気が漂います。調性感が曖昧で、サティ特有の浮遊感が強調されています。

- 特徴: やや暗く重厚な響き、調性感の曖昧さ。
- 印象: 瞑想的で内面的な音楽、終わりを告げるような雰囲気。

総括

《グノシエンヌ》は、サティの作品の中でも特に瞑想的で内省的な性質を持ち、聴く者に深い感情を引き起こします。拍子感や調性が曖昧なため、曲全体に漂う浮遊感が、彼の独創的なスタイルを強く表現しています。また、サティの詩的な演奏指示が作品に深みを与え、演奏者に自由な解釈の余地を残している点も特徴です。

《エンパイア風の歌》と《家具の音楽》 サティは「家具の音楽」と呼ばれるコンセプトを提唱し、背景音として演奏される音楽を作曲しました。これは、現在の環境音楽やミニマルミュージックの先駆けともいえる試みです。「エンパイア風」という言葉自体は、19 世紀初頭のフランスのナポレオン時代に流行した美術や建築、ファッションなどの様式を指す「アンピール様式」(Empire Style)に由来することが考えられますが、この言葉が音楽にどのように適用されるかについては曖昧です。

《ヴェクサシオン》(Vexations、1893 年) この作品は、短いフレーズが 840 回反復されるという非常に奇抜なもので、演奏

時間は 10 時間以上かかることもあります。サティのユーモアや挑発的な精神がよく表れています。

エリック・サティの《ヴェクサシオン（Vexations）》は、非常に特異な作品であり、通常の「1 曲ずつ」の形式で語るようなものではありません。この作品は 1893 年に書かれたもので、サティの最も極端かつ実験的な作品の一つです。

《ヴェクサシオン》は、サティが非常に短い 1 つの楽想（旋律）を作曲し、それを「非常に静かに、厳密に、840 回繰り返し演奏する」という指示を与えた作品です。そのため、全体の長さは演奏者のテンポによって変わりますが、演奏時間は平均して 14 時間から 24 時間にもおよびます。

楽譜はたった 1 ページで、非常に短いフレーズが記されています。このフレーズはディソナントで、ゆっくりとしたテンポで演奏されるべきです。以下にその特徴を挙げます。

1. **短いフレーズ**: 音楽的な素材自体は、数小節のメロディと和声から成っていますが、極めて単調で反復的な内容です。
2. **ディソナンス**: 和音は不協和音が多く含まれており、持続的に不安定な音楽的感覚を与えます。
3. **指示**: サティは演奏者に対して「非常に静かに、厳密に」とだけ指示しています。この厳密さが、音楽の繰り返しによる精神的な影響を強調しています。

演奏と解釈

- 《ヴェクサシオン》は一般的に「繰り返しによる苦痛」を表現したものとされており、演奏者や聴衆の忍耐力を試す作品です。この作品を一人で 840 回演奏することはほぼ不可能であるため、現代では何人かのピアニストが交代しながら演奏することが一般的です。
- ジョン・ケージによって広く知られるようになり、1963 年に彼が初めてこの作品を公開で演奏しました。ケージはこの作品の「反復」というコンセプトを評価し、実験的音楽の先駆者としてサティの《ヴェクサシオン》を再発見しました。

《ヴェクサシオン》は、音楽そのものが目的ではなく、そのプロセスや繰り返しが重要視されている作品です。この作品は、音楽が時間とともにどのように感じられ、どのような心理的影響をもたらすかを問うものでもあります。現代音楽やミニマル・ミュージックの先駆的な作品とみなされることも多く、サティの実験精神がいかに進んでいたかを示しています。

この作品は、従来の音楽的なフォーマットに囚われない新しい芸術表現の形を模索したサティの姿勢を象徴するもので、音楽史上でも特異な存在です。

《三つのサラバンド》(Trois Sarabandes、1887 年)　古典的な舞曲の形式に基づきながらも、従来の和声やリズムの規則に挑戦した作品です。サティの初期の実験的な精神が感じられます。

エリック・サティの《三つのサラバンド(Trois Sarabandes)》は、彼が 1887 年に作曲したピアノ曲のセットです。この作品は、彼の初期の代表的なピアノ作品であり、サティの独自の作曲スタイルを示しています。各曲は「サラバンド」というバロック時代の舞曲形式を基にしており、サティ独自の感性が加わっています。以下は、3 曲それぞれの詳細です。

1. サラバンド第 1 番 (Sarabande No.1)

- **調性・構造**: サラバンド第 1 番は、ゆっくりとしたテンポで進む、優雅かつ荘重な雰囲気を持つ曲です。調性的には複雑で、和声的に新しい道を切り開いています。サティ特有の浮遊感があり、和声が意図的に不安定な感覚を生み出しています。
- **特徴**: バロックのサラバンドに由来する三拍子のリズムを維持しつつも、当時の伝統的な形式から逸脱しています。フレーズは長く引き伸ばされ、繊細な音響の中に複雑な感情を織り交ぜています。
- **表現**: サラバンド第 1 番は、静かで抒情的な性格を持ち、サティの内面的な感情やメランコリーな側面を反映しています。

2. サラバンド第 2 番 (Sarabande No.2)

- **調性・構造**: サラバンド第 2 番は、3 つの中で最も対位法的な性格を持ち、和声的にもさらに大胆な進行が見られます。サティはここで、急激な転調や独特なリズムの変化を導入しています。
- **特徴**: 第 2 番は重々しい雰囲気を持ちつつも、和声的にはさらに複雑な動きを見せています。旋律は静かながらも、深い感情を内に秘めたものとなっており、聞き手にとって不安感や神秘的な印象を与えます。
- **表現**: この曲は第 1 番よりも内省的で、暗いトーンが特徴的です。和声の重層的な進行が、この曲をより難解かつ魅力的にしています。

3. サラバンド第 3 番 (Sarabande No.3)

- **調性・構造**: サラバンド第 3 番は、3 曲の中で最も明るく、軽快な性格を持っています。調性の面では、他の 2 曲に比べてより伝統的な和声進行を示しており、リズム的にも一貫しています。
- **特徴**: この曲は、繰り返されるモチーフが穏やかでありながらも力強い印象を与えます。和声は比較的シンプルですが、サティ特有の響きの使い方が、独自の詩的な感覚を引き立てています。
- **表現**: 第 3 番は、全体的にやや軽やかで、リズムも優雅です。バロックのサラバンドの形式に忠実でありながら、サティの個性的な感性が全体を貫いています。3 曲の締めくくりとして、明るいフィナーレを提供しています。

《三つのサラバンド》は、サティが従来の音楽形式を新しい視点で捉え、独自の和声やリズムを探求した重要な作品です。彼の音楽は、この時期から伝統的な形式に新しい生命を吹き込む姿勢が見られ、のちのミニマル音楽や印象派の作曲家たちにも影響を与えました。また、サティ自身が当時の音楽界に対して独立した立場をとり、前衛的な音楽を模索するきっかけともなった作品でもあります。

《ノクチュルヌ》(Nocturnes、1919 年-1921 年) 5 曲

からなるこの作品は、サティ晩年の作品で、より抑制された表現と簡潔な形式が特徴です。

エリック・サティ(Erik Satie)の《ノクチュルヌ(Nocturnes)》は、彼が 1920 年に作曲したピアノのための 5 曲からなる作品です。サティは、独特なユーモアや風刺を音楽に織り込むことで知られていますが、この「ノクチュルヌ」は例外的に内省的で、感傷的な要素が強い作品集です。これらのノクチュルヌは、サティの晩年の作風を反映しており、感情を抑えたミニマルな構成が特徴です。

1. ノクチュルヌ第 1 番

- **概要**: 曲集の冒頭を飾る第 1 番は、比較的穏やかでゆったりとしたテンポを持ち、シンプルな旋律が繰り返されます。感情表現を抑えつつも、静謐な雰囲気が漂います。
- **構造**: 極めてミニマルな形式で、音の動きは少ないものの、独特の響きと和声が印象的です。右手と左手のバランスが重要で、静かで落ち着いた空間を作り出します。
- **表現**: メランコリックでありながらも感傷的ではなく、冷静な静けさが感じられる曲です。夜の穏やかで静かな情景が思い浮かびます。

2. ノクチュルヌ第 2 番

- **概要**: 第 2 番は、第 1 番に続き静かな曲調ですが、少し緊張感が増します。リズムの繰り返しが強調され、単調な中に抑制された感情が感じられます。
- **構造**: 和音の進行は非常にシンプルですが、その簡潔さが逆に深い表現力を持っています。感情が爆発することなく、一定のペースを保ちながら進行します。
- **表現**: 第 1 番よりも少し陰鬱な雰囲気を感じさせますが、全体として冷静さが保たれています。サティの独特の簡潔さが表れた曲です。

3. ノクチュルヌ第 3 番

- **概要**: 第 3 番は、明るさや緩やかな動きを持ちながらも、心の奥底にある静かな情感を表現しています。旋律が繰り返される中で、音の間に広がる空間が印象的です。
- **構造**: 他の曲同様、シンプルな和声進行が続きますが、短いフレーズが何度も反復されることで、独特のリズム感と安定感を生み出しています。

- **表現**: 第 1、2 番とは異なり、少し開放感を感じさせる曲ですが、それでもサティ特有の冷静さが漂っています。美しい音の重なりが印象的です。

4. ノクチュルヌ第 4 番

- **概要**: 第 4 番では、さらに内省的で、音楽が静寂の中に溶け込むような印象を与えます。感情の抑制がさらに強く、夜の静けさや孤独感が色濃く表現されています。
- **構造**: 音の動きは少なく、極めて静かに進行します。左手が一定のリズムを刻む中で、右手の旋律がそれに寄り添う形で流れます。
- **表現**: サティの抑制された表現が最も強く現れた曲の一つで、静謐さと内向的な感情が交錯しています。非常に静かな夜の情景が浮かび上がるような曲です。

5. ノクチュルヌ第 5 番

- **概要**: この最後のノクチュルヌは、他の曲と同じく控えめな表現を持ちながらも、少しだけ動的な要素が含まれています。しかし、それでも感情が爆発することはなく、全体として冷静さが保たれています。
- **構造**: これまでのノクチュルヌと同様、ミニマルでシンプルな和声進行が繰り返されますが、右手と左手のリズムの交錯がより複雑に絡み合っています。
- **表現**: 他のノクチュルヌに比べてやや動きがあるものの、全体としては穏やかで、夜の終わりを示唆するような感覚を持っています。

これらのサティの《ノクチュルヌ》は、ショパンや他の作曲家のノクターンとは異なり、感情表現を極力抑え、シンプルで内省的な美しさを追求した作品です。曲の進行は非常にゆっくりで、リズムや和音の反復が強調されており、まるで夜の静寂の中で心が静かに揺れる様子を描いているかのようです。

思想

サティは、従来の音楽理論や形式に対して強い反発を示し、伝統にとらわれない自由な創造を求めました。彼は音楽が感情を過度に表現することを嫌い、より冷静で客観的な音楽を目指しました。また、彼はユーモアや皮肉を音楽に織り交ぜることが多く、そのタイトルや指示書きに風刺的な要素を加えることが多々ありました。

彼の思想には、音楽を超えた芸術や哲学に対する興味も見られ、象徴主義やダダイズムなどの前衛的な芸術運動にも影響を受けました。サティはまた、音楽が「実用的なもの」であるべきと考え、「家具の音楽」や「日常の中の音楽」というコンセプトを提唱し、音楽を従来の鑑賞対象から解放しようとしました。

人間関係

サティは、彼の音楽人生において多くの重要な芸術家や音楽家と関わりを持ちました。若い頃に親交を持ったモーリス・ラヴェルは、サティを「新しい音楽の父」と呼び、彼の前衛的な試みを賞賛しました。また、クロード・ドビュッシーとも交流があり、ドビュッシーはサティの影響を受けて《ジムノペディ》をオーケストレーションしました。

彼はジャン・コクトーとも密接に協力し、バレエ《パラード》では、画家のパブロ・ピカソや詩人ギョーム・アポリネールとも共同で仕事をしました。このバレエは、初演時にはスキャンダルを巻き起こしましたが、芸術界に新しい風をもたらしたとされています。

まとめ

エリック・サティは、従来の音楽の枠を超えて新しい表現を追求した革新的な作曲家であり、彼の音楽は今なお多くの人々に影響を与えています。彼のピアノ曲はシンプルながらも独自の美学を持ち、彼の思想や人間関係は、当時の芸術界に大きな影響を与えました。